

## 断定形につく終助詞ガの地理的分布

杉浦 滋子

キーワード：日本語、方言、終助詞ガ、推量形、断定形

### 要旨

『NHK 全国方言資料』第 1-6 巻のデータの分析により、推量形に終助詞ガがつく場合の用法、断定形に終助詞ガがつく場合の用法を記述し、後者は前者から派生したと主張した。また、断定形にガがつく用例がある地点を地図化し、その結果から、断定形につくガはかつてより広く分布していたが、優勢な地域で他の終助詞が用いられることによって分布が狭くなったと考えられる。

### 1.はじめに

杉浦(2006)では、終助詞ガに注目し、推量形につく場合と断定形につく場合があること、方言により前者のみをもつものもあることを指摘した。本稿では、北海道から九州までの『NHK 全国方言資料』第 1-6 巻(「本土一般型方言」の 84 地点の資料、以後『資料』と表記)においてガがどのような地理的分布をしているかを調べた。

推量形とここで呼ぶのは、動詞・形容詞の未然形にウ・ヨウがついたものに加え、動詞・形容詞につく(ダ)ロウ類、ベ類とロウから派生したと考えられるドである。これらの形式は皆推量を表すことができるが、意思、勧誘、当然、適当などと表現できる意味をもつ場合もあり、それらも対象とした。断定形とは、そのような推量形を含まない形式を指す。

### 2.終助詞ガの機能

日本語の諸方言の中で、推量形と共起するガ、そして断定形と共起するガがどのような機能をもつか概観する。データにもとづき、諸方言の中で推量形と共起するガの意味は五分類、断定形と共起するガは二分類した。

#### 2.1 推量形につくガ

##### 2.1.1 リマインドし、苛立ちを表す文脈

共通語の推量形には(1a)のように、話し手も聞き手も認識している(と話し手が信じている)命題について聞き手にリマインドする用法がある。そして、(1b)のように、これに終助詞ガを用いることができる。

- (1)a. 眼鏡ならそこにあるでしょう。  
 b. 眼鏡ならそこにあるでしょうが。

違いは、(1a)においては聞き手もそれを知っているはずだが忘れている、あるいは十分認識していないように見受けられることを明確に認識させようとしている点である。加えて、聞き手に対する苛立ちあるいは呆れる気持ちを表す。現在の共通語においてガが見られるのはこの用法においてのみと言えよう。<sup>1</sup>

### 2.1.2 リマインドする文脈

『資料』の中には、次のように、聞き手も知っているはずであることを認識させようとしているが、2.1.1 のガとは違い、聞き手に対する苛立ちや呆れる気持ちがないものが見られる。(2)は聞き手が過去の災害の話をしようとし始めたときに、それがどの折だったかをより詳しく述べている。ガがない場合と比べると、話し手の認識が正しいことを強調していると考えられる。(3)は、最近の若い人に「さつまいもでも食べないか」ともちかけても嫌な顔をされるという発話を受けて、「若い人にそんなことを言っても返事もしないでしょう!？」という発話である。話し手が命題が成立することを知っており、聞き手もそれを知っているはずだと信じている点で上の例と同じである。聞き手に対する苛立ちや呆れる気持ちはないが、話し手の主張が正しいという気持ちがある。推量の形式ドが用いられている。(4)では、昔よその家の手伝いをして食べ物をもらった時の話し手・聞き手双方の思い出話を語っている。

- (2) アリャ フツグワイタン デタ トキチャローガ (宮崎県南方<sup>2</sup>)  
 あれは 福川板の (荷が) 出た ときでしょう。  
 (3) ヘントー シモハンドガー<sup>3</sup> (鹿児島県枕崎)  
 返事をしないでしょう。  
 (4) ソレオシテ イレタチャロガ (石川県白峰)  
 それを 入れてあったでしょう。

次のように他の助詞との複合形も見られる。(6)では否定の推量の形式マイが用いられている。ダロウとジャナイカが置き換えが可能な文脈があることは以前から指摘があ

<sup>1</sup> 享和期(1801-1804)江戸洒落本にはこの用法ではない例が挙げられている(鶴橋 2013、p.71)ので、かつては苛立ちを伴うリマインド以外の用法があった可能性がある。

(i) おかしいねへ。こつちへはたまでも外へはお出なんすだらうがへ(『後編にほい袋』二十一 152 下 17)

<sup>2</sup> 調査地点の名称は簡略化して示した。調査時の地点名については表を参照。

<sup>3</sup> 元の共通語訳は「返事をしないでしょうが。」今回分析するにあたって『資料』のデータの共通語訳を一部見直した。変更箇所を附録に挙げた。

るが(宮崎 1996 およびそこに挙げられている先行研究など)、(5)(6)どちらにおいても、推量形とガを併せて共通語訳のジャナイカがあてられていることに留意されたい。

- (5) ワセンノ ホーガ ヨカロガイナ (香川県詫間)

和船の ほうが いいじゃないですか。

- (6) ツレニ ジガ デキルノワー オラスマイガノ ダレツチャ (香川県詫間)

わたしたちの 仲間に 字ができるのは いやしないじゃないか、だれも。

### 2.1.3 後に続く話の前提となる命題を述べる文脈

推量形は次のように話の途中で前提として必要な情報を述べるときに使われる。この情報は聞き手が知らないことであってもよいという点で今までの用法と異なるものの、聞き手がある程度見当がつく情報、または話の流れから予想できる情報である。

- (7) そんなこと言われても私だって困るでしょう、すぐ断りましたよ。

『資料』においても、このような例が見られる。(8)は、馬を飼うと情が移るという会話の流れの中の発話、(9)は話し手がすいかを売りに行く話の流れの中の発話である。

- (8) イツモ モッテッテヨー ナニカ マメデモ ニテッテイルズラ コリャ ビー  
コイ スッテソート チャーント シッタッテ クルデナー (長野県新開)

いつも 連れて行ってね、何か 豆でも 煮て持って行っているだろう。「これこれ、ビー来い」と言うと、ちゃんと 知っていて寄って来るからねえ。

- (9) マジニ トナリガラ トナリ ナランデベ アレ スイガガヨ (栃木県黒羽)

町では 軒なみ 並べて売っているでしょう、ほら、すいかをさ。

一部の方言においてはそのような場合にガの複合形式が見られた。次の例は、話し手の親戚全部が同じ状況であることを話の途中で必要な情報として述べている。

- (10) イッカウチガ ミナ ソーヤログヤ アンニャン トコガ ソー ネーガ ト  
コガ ソー ミナ ソイヨナン (香川県詫間)

親せきが みな そうでしょう。にいさんの ところが そう、ねえさんの ところがそう、みな そうなんです。

### 2.1.4 判断の共有を求める文脈

聞き手が知っていることでも見当がつくことでもない、話し手の判断に聞き手に同意してもらいたい場合に次のように共通語でダロウが用いられる。

(11) これいいだろう。

方言によってはこの場合にもガが用いられる。(12)は、子供の着物を買ってくるよう妻に頼まれ、買って来たものの、妻がこの柄は子供に似合わないかもしれないと述べたことに対する発話なので、「柄がいい」という判断を聞き手である妻に対して主張し、受け入れさせようとした発話である。自分のあることに対する判断を、それを共有していないと考えられる相手に受け入れさせようというものである。

(12) ソゲ アルカー ガラ ヨカローガー (福岡県岩屋)  
 そんなこと あるか、柄はいいだろう。<sup>4</sup>

次のように、複合形がこの場合に用いられる場合もある。話し手に孫が生まれた状況で、自分の判断を相手に受け入れさせようとしている。

(13) エーコデヒョーガイ (広島県水内)  
 いい子でしょう<sup>5</sup>。

#### 2.1.5 推量した命題について確認を求める文脈

今までの用法は話し手が知っていることを表明したり、判断を示しているので、本来の推量とは異なるが、外から帰って来た聞き手を迎える状況で(14)は本来の推量の意味をもち、聞き手にその確認を求めている。もちろん、方言の中にもこのような例が見られる。

(14) 暑かったでしょう。  
 (15) アツカツツラ (長野県新開)  
 暑かったでしょう、  
 (16) ツカレダッペヤ (茨城県葦穂)  
 疲れたでしょう。<sup>6</sup>

この用法で、方言によってはガが使われる。(17)-(19)は上記と同じ外から帰った人をねぎらう状況、(20)は、ある家に行くのに時間がかかり、着いた時に遅かった理由はどこかで酒を飲んでいたんだろーと言われたという発話である。

<sup>4</sup> 元の共通語訳は「そうかい、柄はいいだろう」。

<sup>5</sup> 元の共通語訳は「いい子でしょうが」。

<sup>6</sup> 元の共通語訳は「疲れたでしょうよ」。

- (17) クタビッチャベガ マ (福島県勝常)  
くたびれたでしょう まあ<sup>7</sup>。
- (18) クタブレタッタロガ (新潟県朝日)  
疲れたでしょう<sup>8</sup>。
- (19) アツカッタデショーガ (岡山県勝山)  
暑かったでしょうね。
- (20) トジーデ ヤッテキタロガ チナ (茨城県葦穂)  
「途中で1杯やって来たろう」と言うんだ<sup>9</sup>。

この場合も次のように複合形が見られる。

- (21) モ ガツツイ ノサンゴッ アッタローガナー (鹿児島県枕崎)  
ほんとに きついことでしたらうねえ。

ガと後続の終助詞が音声的に融合したとみられる変異形も用いられる。

- (22) ツカレタロゲー (富山県入善)  
疲れたでしょう。

以上から、次のようにまとめることができる。

	推量形の機能	(ガが現れる場合) ガの機能	話し手の状況	(話し手の考える) 聞き手の状況
(I)	リマインド	苛立ちを表す	その事実を知っている	その事実を知っている
(II)	リマインド	強意を加える	その事実を知っている	知っている蓋然性が高い
(III)	後に続く話の前提として聞き手に認めさせようとする	強意を加える	その事実を知っている	予想できる
(IV)	判断を共有させようとする	強意を加える	判断をしている	知らない
(V)	聞き手の状況、感覚、行動を推量する	強意を加える	推量をしている	知っている

<sup>7</sup> 元の共通語訳は「くたびれたでしょうが まあ」。

<sup>8</sup> 元の共通語訳は「疲れたでしょうよ。」

<sup>9</sup> 元の共通語訳は「『途中で1杯やって来たんだろう』 と言うんだ。」

推量形が話し手の推量を表すのは(V)の場合のみとなる。また、ガの機能として、(I)では「苛立ちを表す」としたが、これも他の文脈での「強意を加える」に含めることができるだろう。

(I)(II)は、確認要求と呼ばれるもので、ジャナイカあるいはそれに相当する形式が用いられる状況と同じか、あるいは近似している。

(23)a.眼鏡ならそこにあるじゃない (か)。

b.眼鏡ならそこにあるじゃないですか。

(24)a.返事もしないじゃない (か)。

b.返事もしないじゃないですか。

(III)においては、ジャナイ (カ) は許容されるがジャナイデスカは一部の使用者にとっては違和感があるであろう。

(25)a.すいかを町では並べて売ってるじゃない、

b.すいかを町では並べて売ってるじゃないですか、

(IV)においては、話し手が判断をくだす事物が話し手の領域に属す場合にはジャナイ (カ)、聞き手の領域に属す場合にはダロウのみが許容される。

(26)a. その帽子いいじゃない。

b. この帽子いいだろう。

## 2.断定形につくガ

先行研究にも指摘があるように、ガが推量形ではない断定形と共起する方言も多く見受けられる。個別方言に関する文献には、このようなガが共通語のジャナイ (カ) に相当すると記述されているものが見られる。『群馬県のことば』では、「中部方言域を中心として、ガン・ガナ・ガノ・ガネ・ガーが、共通語の「じゃない」に相当する」(p.40)とあり、『大阪府のことば』『奈良県のことば』にはガナが「じゃないか」に相当するが、若年層ではヤンカが用いられるとある(それぞれ p.53,p.30)。<sup>10</sup> 三重県方言について榎垣(1972:63-64)は三重県方言についてガナ、ガン、ガが共通語ジャナイカと類似するガより軽いと述べる。また、共通語のヨ、ゾ、サなどに相当すると記述する文献も見られる。

<sup>10</sup> 『奈良県のことば』には『～のではないか』に相当する」(p.30)とあるが、挙げられている例文は「まあ、今日はこれぐらいにしといたらええガナ。」であり、「～のではないか」ではなく「～ではないか」の方が適切である。

個別方言について明示的に共通語ジャナイカに相当するガとヨに相当するガの二種類があるという観察がされているもの（『都道府県別全国方言辞典』岡山県の項、『群馬県のことば』など）もある。また、他の終助詞との複合がどの程度見られるかということについても違いがあり、どの終助詞と共起するかが話者の性別や年齢と関係するという観察も見られる（『群馬県のことば』）。先行研究において、特定の他の終助詞と複合した形で共通語ジャナイ（カ）に相当するとされるものも見られる（和歌山方言のガナについての楳垣 1938 など）。前述したように、推量形とガが共通語ジャナイ（カ）に相当する場合があるので、推量形とガの組み合わせがジャナイ（カ）に相当する方言と、断定形につくため、ガ単独がジャナイ（カ）に相当すると見られる方言があるわけである。

断定形につくガが共通語ジャナイ（カ）に相当する例から見てみる。(27)は、聞き手が自分は歌が下手だというのに対して、聞き手が取り歌が上手だったことを発言しており、共通語訳でも「ではありませんか」があげられている。(28)では、以前の祭は荒っぽくて女性がのんびり歩いたりできなかったが、現在はそんなことはなくなっていると、話し手と同じように以前も現在も知っている聞き手に対して述べている。(29)は、話し手も聞き手も経験した災害についての談話の中の発話、(30)は、女性である話し手が今まで船に乗せてもらって漁に参加していたが、今の状況ではそうしづらいという発話である。(29-31)においても話し手が述べていることを聞き手も認識していると考えられ、それぞれ共通語訳として「孫兵衛の家の流れた年でしょう／年じゃない」、「その日にもう降ったでしょう／降ったじゃない」、「『乗せてくれ』とも言えないでしょう／言えないじゃない」「その日にもう降ったでしょう／降ったじゃない」としてもおかしくない。つまり、ガ単独でダロウやジャナイ（カ）と置き換えられる。

- (27) トリウター イーガ（愛知県作手）  
「取り歌」 はじょうずだったではありませんか。
- (28) ゴロリ ゴロット アルイトルガジャガー<sup>11</sup>（石川県名船）  
しゃなりしゃなりと 歩いているではありませんか。
- (29) マゴベノ ナガレダ トシダガ（新潟県朝日）  
孫兵衛の家の流れたあの年ですよ。
- (30) ノセテ クレトモ イエンガー（香川県詫間）  
「(網船に) 乗せてくれ」 とも 言えませんよ。
- (31) フル ソノ ヒニ マズー エー フッタガー ヒルマッカラサ（宮城県根白石）  
降るわ その日にもう 降ったね、 昼間からね

次の例は複合形だが、同様にともに経験したできごとについての発話なので、「ずいぶんほうぼうへ落ちたでしょう／落ちたじゃない」と共通語訳してもおかしくない。

11 「アルイトルガジャガー」の下線部のガは準体助詞。

- (32) コナイダノ ナンカモ ズイブン ホーボーエ オチタガネー (群馬県大胡)  
この間の なんかも ずいぶん ほうぼうへ 落ちたよね。

ガの複合形とジャナイカが同じ発話で現れる場合もあった。これは、聞き手が「もう船に乗れない」と言ったのに対し、そんなことはない、漁に携わる者の間でもいちばんの位置にあるではないかと励ました発話である。続けてジャナイカイで同じ内容を述べていることから、これらの用法の機能の類似がわかる。

- (33) アゴジャガエ イチノ アゴジャナイカイ (香川県詫間)  
網子じゃないか、 いちばんの網子じゃないか。

しかし、上の例でも共通語訳としてダロウ・ジャナイ(カ)のほかにヨでもあてられる場合がある。それは、聞き手が知っている事実についてもヨが使えるからである。

ダロウやジャナイ(カ)に置き換えられないものとして、次のように聞き手が発話された命題について知らないことがはっきりしている場合がある。(34)は過去の災害のときのできごとで話し手のみが知っていることについて述べたもの、(35)は話し手の家で不幸があったことについて悔みに来た聞き手に対して発話したものである。

- (34) アノ フターリ ナゴゼンスガ (岩手県宮古)  
あの 二人 死んでしまったんですよ
- (35) ニワカニ シンデ シモタガ ジーサヤレ (新潟県朝日)  
急に 死んで しまいましたよ、 おじいさんよ。

このように共通語訳でダロウ、ジャナイ(カ)に相当せず、ヨなどで共通語訳される。先行研究には「やや強めの訴えに用いられる」(『新潟県のことば』p.32)、「念押し」(京都方言について奥村 1962)、「軽い感動・英ガンを表す」(ガ・ガエ・ガエナ・ガイナなどに関して『徳島県のことば』p.20)、「主張・説得を表す」(『福岡県のことば』p.35)といった記述が見られる。鹿児島県の例が特に興味深く、『鹿児島県のことば』には、伝達を表す終助詞にド<sup>12</sup>とガの二種類があり、どちらにも共通語訳でヨがあてられているが、ガは自明の判断として伝達するとある(p.21)。

断定形にガがつく場合には、共通語のダロウ(デショウ)／ジャナイ(カ)に相当する機能をもつ場合と、共通語のヨのような伝達の機能をもつ場合があることを見た。これは、推量形につくガは「強意を加える」というひとつの機能にまとめることができたのとは対照的である。

<sup>12</sup> 推量を表すドとは異なる形式。

### 3.断定ガの地理的分布

藤原(1986)には、終助詞ガは九州全域、中国地方全域、四国全域（ただし徳島県、香川県では弱め）、近畿地方全域、中部地方福井県・石川県・富山県・新潟県・岐阜県・愛知県、関東地方群馬県・八丈島で用いられるとある。本稿では『資料』のデータから終助詞ガがどのような地理的分布を見せるかを調べたが、原則的に原資料の共通語訳をもとに終助詞ガを認定した。しかし、資料の中には終助詞ガを逆接接続詞ガと誤って認定していると思われるものなどもあったので、筆者が見直しを行った。<sup>13</sup> さらに、断定形につくガ(断定ガ)(他の終助詞がガにつくものを含む)、推量形につくガ(推量ガ)を調べた。また、推量形としてはベシに由来するベの類、ラムに由来するロウ・ダロウ類、動詞・形容詞・助動詞の推量/意志/勧誘形、ベシと対応するマジに由来するマイについて見た<sup>14</sup>。ロウ・ダロウ類にはロウに由来するとされるドを含め、さらにデショウ、ゴザイマショウなどもダロウの丁寧形と判断してロウ・ダロウ類に含めた。結果を地図化するにあたって、『資料』の地図を元にしたため、現在の当道府県境ではなく、藩境が示されている。また、複数枚の地図を一枚にまとめたため、接合部に不整合が生じた。

地点	断定 ガ	推量 ガ	よう ガ	ろう ガ	べー ガ	まい ガ	よう	ろう	べ	まい
1-11 北海道松前郡福島町白符									15	
1-12 北海道美唄市西美唄山形	1							1	10	
1-1 青森県南津軽郡黒石町								1	19	
1-2 青森県三戸郡五戸町									16	
1-3 岩手県宮古市高浜	6								6	
1-4 岩手県胆沢群佐倉河村									11	
1-5 宮城県宮城郡根白石村	3								13	
1-6 秋田県南秋田郡富津内村	1							1	28	
1-7 山形県美並置賜郡三沢村									9	2
1-8 山形県東田川郡黒川村	1	1					4	7		2
1-9 福島県相馬郡石神村									14	3
1-10 福島県河沼郡勝常村	3	1			1				6	3
2-1 茨城県新治郡葦穂村		1		1				2	9	4
2-2 栃木県那須郡黒羽町	1	1			1			1	25	5

<sup>13</sup> 修正した箇所は附録として付記した。もちろん筆者の解釈が違っている可能性もあるので、幅広くご教授いただければ幸いである。

<sup>14</sup> 関東方言の推量の助動詞ナムが変化したとされるノーが八丈島、伊豆利島に見られ、ガと共に起る（北条 1961、大島 1962）が、島嶼方言は本稿では扱わない。

地点	断定 ガ	推量 ガ	よう ガ	ろう ガ	べー ガ	まい ガ	よう	ろう	べ	まい
2-3 群馬県勢多郡大胡町	12							3	16	
2-4 埼玉県秩父郡両神村	7								15	2
2-5 千葉県安房郡富崎村布良									17	
2-6 千葉県香取郡小見川町神里	1								21	
2-7 東京都江戸								6		
2-8 神奈川県愛甲郡宮ヶ瀬村							1	3	13	1
2-9 新潟県糸魚川市砂場	3							5		
2-10 新潟県中魚沼郡津南町結東	7	2			2				6	
2-11 新潟県岩船郡朝日村高根	23	1		1				2		
2-12 山梨県南巨摩郡早川町奈良田	10							5		
2-13 山梨県北都留郡上野原町西原	2								7	
2-14 長野県上伊那郡高遠町山村旧三義村								9		
2-15 長野県西筑摩郡新開村黒川西洞	5							8		1
2-16 長野県更級郡大岡村芦の尻	4							1		
3-1 富山県氷見市飯久保	2	1		1			2	4		1
3-2 富山県下新川郡入善町小摺戸	14	5	3	2				11		
3-3 石川県輪島市名船町	8	1	1				1	8		
3-4 石川県石川郡白峰村白峰	1	1		1			1	8		2
3-5 石川県河北郡内灘村大根市	6						1	9		
3-6 福井県丹生郡織田町笈松	4							6		
3-7 福井県遠敷郡名田庄村納田終		1		1				11		
3-8 岐阜県郡上郡白鳥町石徹白	9							5		
3-9 岐阜県揖斐郡久瀬村西津波	1									
3-10 岐阜県吉城郡古川町黒内	2	1				1		5		3
3-11 静岡県吉原市吉永							2	1	1	

断定形につく終助詞ガの地理的分布  
杉浦 滋子

地点	断定 ガ	推量 ガ	よう ガ	ろう ガ	べー ガ	まい ガ	よう	ろう	べ	まい
3-12 静岡県掛川市上西之谷										
3-13 愛知県海部郡立田村小家	6							5		
3-14 愛知県南設楽郡作手村菅沼	8						2	3		
4-1 三重県一志郡美杉村川上	3							5		
4-2 三重県志摩郡浜島町南張	6						1	4		
4-3 三重県北牟婁郡海山町河内	7							5		
4-4 滋賀県犬上郡多賀町菅原	10							7		
4-5 滋賀県高島郡朽木村	5							8		
4-6 大阪府大阪市	8							17		
4-7 京都府京都市								17		
4-8 兵庫県神埼郡神埼町粟賀	11							3		
4-9 兵庫県城崎郡城崎町飯谷	3							4		
4-10 奈良県山野へ郡都祁村旧都介野村	5	3		3				20		
4-11 和歌山県日高郡竜神村大							1	3		
4-12 和歌山県東牟婁郡古座町							1	1		
5-1 鳥取県倉吉市国分寺	9	1		1			3	3		
5-2 島根県大原郡大東町春殖畑鶴	14						2	2		
5-3 島根県那賀郡雲城村	2	2		2			4	10		2
5-4 岡山県真庭郡勝山町神代	3	2		2			3	8		
5-5 広島県庄原市山内町旧比婆郡山内西村	6	1		1			4	9		1
5-6 広島県佐伯郡水内村	5	2		2			1	13		1
5-7 山口県都濃郡戸濃町旧須金村	9	1		1			1	8		1
5-8 山口県美祢郡秋芳村別府江原	5						4	6		2
5-9 徳島県那珂郡延野村雄							3	11		2
5-10 香川県三豊郡詫間町大浜肥地木	17	5	1	3		1	1	5		1
5-11 愛媛県温泉郡川内村井内	3						2	3		

地点	断定 ガ	推量 ガ	よう ガ	ろう ガ	べー ガ	まい ガ	よう	ろう	べ	まい
5-12 愛媛県北宇和郡津島町	14						2	7		
5-13 高知県香美郡美良布町	11							4		1
5-14 高知県幡多郡大方町	11						2	3		
6-1 福岡県福岡市博多		1		1			4	17		
6-2 福岡県三井郡善導寺町	3	1		1			3	11		2
6-3 福岡県築上郡岩屋村鳥井畑		1	1				9	14		3
6-4 佐賀県佐賀郡久保泉村川久保	2						10	11		1
6-5 佐賀県東松浦郡有浦村							7	16		1
6-6 長崎県南高来郡有家町	1							10		
6-7 長崎県北松浦郡中野村	1						1	12		
6-8 熊本県熊本市中唐人町							2	14		
6-9 熊本県上益城郡浜町		1		1			4	9		
6-10 大分県大分郡西庄内村	4						2	5		2
6-11 大分県南海部郡上野村	10	1		1			2	11		1
6-12 宮崎県日南市飫肥町	16	2		2			4	17		
6-13 宮崎県東臼杵郡南方村	20	5		5				12		
6-14 鹿児島県鹿児島市	15	2		2			1	17		2
6-15 鹿児島県枕崎市鹿籠	13	6		6			3	19		
6-16 鹿児島県肝属郡高山町麓	14							5		1
合計	406	54	6	41	4	2	101	517	277	53

分析した結果、まず、べにガがつく例が非常に少ないことがわかった。ウ・ヨウにガがつく例は101例、ロウ類にガがつく例は517例あったのに対し、べ類がつく例は4例のみであった。図2にはべ類の見られる地点を示したが、図1と図2で示した地点にほとんど重なりがないことがわかる。また、べ類にガがつく4例においては、べ類が推量を表すものだった（Vの用法）。この事実と、共通語のようにロウ類にのみガがつく方言があること、のようにガの前にだけウ・ヨウが現れる方言があることを考えると、終助詞ガは元々ウ・ヨウ、そして動詞アルのウ・ヨウ形から変化したロウ類につく環境にのみ現れるという性質をもっていて、その後、ウ・ヨウおよびロウ類のない断定形にもつくようになるという変化が生じたと考えられる。日本語において、推量形がこのように、もともとある特定の終助詞の前に現れていたのに、後に現れなくなった例はほかにある。ジャナイ（カ）は終助詞と考えてよいが、東京出身の夏目漱石には、次のようなジャナ



図1 断定ガの分布 ● 10例以上  
● 5-9例

イカの前にダロウが現れる例が『吾輩は猫である』に4例、『それから』に2例見られるので、東京である程度使われていた用法と見られるが、現在では使われていない。

- (36)a. 「御前にさえ、そのくらい似合うなら、妾(あた)しにだっておかしい事はないだろうじゃないか」『吾輩は猫である』三  
b. 「なんぼ、僕だって、そう無責任な翻訳は出来ないだろうじゃないか。」『それから』十一

また『資料』のデータの中にも推量の形式にジャナイが続くものがあった。<sup>15</sup>

<sup>15</sup> ベ類にも次の例が見られた。

(i) ナンダンベジャネーカ (埼玉県両神)  
あれだろうじゃないか



図2 ベ類の分布 ■ ベ類の例あり

(37) アノ ユノヤマノ サンガイ チューモナ フルイモノデ ガンヒョージャナイ  
ノ (広島県水内)

あの湯の山の3階(家)というものは古いものではないの<sup>16</sup>。

なお、鶴橋(2013)によると、動詞推量形にジャナイカ類がつく例は江戸洒落本では享和(1801-1804)以降にある (p.71-72、形容詞推量形にジャナイカ類がつく例はそれ以前の明和(1764-1772) に例があるとのこと)。

さらに、長野県(中信)、山梨県では、勧誘の表現として、それぞれ「映画行くジャンカ」、「一緒に飲むジャン」という例が挙げられている(『都道府県別全国方言辞典』p.132,p.140)。ほかの方言ではこのような文脈で「行こうじゃないか」「飲もうじゃない」と推量の形式が使われるので、これらの方言で「行こう」のような推量形との共起から、「行く」のような断定形との共起という変化があったと思われる。また、『日本のこと

<sup>16</sup> 元の共通語訳は「あの湯の山の3階(家)というものは古いものではないでしょうかね。」

ばシリーズ『鹿児島県のことば』には次のような文が例示され、ガには勧誘の意味もあると述べられている。

(38) イッショー イク ガ (一緒に行こう)

この例においても、もとは勧誘形が勧誘の意味を持っており、ガはそれを強める伝達の機能を持っていたが、ガが勧誘の意味を持つという形で再分析され、動詞が断定形となったという推測がなりたつ。さらに、共通語において、未来の推量、未来の意志を表すのに(38)のように断定形を用いる。これらの形式も推量／勧誘形というひとつの形式が推量、意志、勧誘など多くの意味を持っていた状態から、その一部を特定の形式が表すようになっていく流れのひとつの形であろう。

(39)a. 明日は多分雨になる。

b. 買い物には私が行く。

ガが断定形につくようになるというこの変化はどのように起きたのだろうか。鹿児島方言でガが強い伝達から勧誘を意味するようになったのと同じように、リマインドの機能をもっていた推量形とガの組み合わせにおいて、もともと強い伝達という意味をもっていたガがリマインドを表すと再分析され、そのため動詞が断定形で現れるようになったと考えられる。このようにして断定形にガがつくようになって、そこからヨに相当するような用法が派生したと考えられる。先行研究でガの使用について「自明の事として」という表現があったが、「自明」という表現は、聞き手がその事実を知っている場合も知っていない場合（聞き手は知らないかもしれないが話し手が知っていてしるべきと考えている場合）も含まれる。「眼鏡ならそこにあるガ」であれば「あなたも知っているように眼鏡ならそこにあるじゃない」というリマインドの文脈でも、「眼鏡ならそこにあるよ、あなたは気がついていいはずだ」という文脈でも使える。そこから(34)(35)のように、聞き手が知らない事実を述べる場合にも使うようになったものと思われる。

分布を検討すると、九州の中で、大分、宮崎、鹿児島には多いが、福岡、長崎、佐賀、熊本には非常に少ない。中国地方では平均的に分布している。四国地方では徳島県、香川県で弱いとあるが、徳島では確かに見られないものの、香川県では使われている。近畿、北陸にはある程度見られ、関東甲信越の一部の地域に見られる。べ類が特徴的でガがほとんど見られない東北・北海道を除いて断定ガが現れる地点を見ると、ある地点から広まっていったという分布よりは、より広く分布していたが、新しい形式が広がることによって地域的に限定されていった結果の分布とみるべきであろう。そして、特に九州地方の分布にそれがはっきり表れているが、他地方でも概ね政治・経済の面で優勢な

地域から遠い地域に残存する傾向である。関東甲信越を見ると、断定ガは千葉県香取郡小見川町神里の一例を除くと群馬県勢多郡大胡町(12例)と埼玉県秩父郡両神村(7例)のみである。なぜベ類使用地域であるこの2地点に断定ガが見られるのか、については二つの仮説が考えられる。

- 1) もともと推量ガも断定ガもなかったが、北陸地方からの影響で断定ガが出現
- 2) もともと断定ガは関東により広く分布していたが、東京を中心に新しい形式がとってかわり、群馬・埼玉に残存

現時点ではどちらも考えられるが、ナモシあるいはそれに由来すると考えられる終助詞について、藤原(1962)は、群馬・埼玉の山間部にナモシの類であるムシが多く見られることを挙げ、長野県北部、新潟県、長野県東部、茨城県、房総半島にナモシの類が見られることから、関東地方にはナモシ類がある程度分布していたが、新たな形式の台頭によりこのような分布に残存したと推測しており(p.359-60)、断定ガについても同じように2)が起こったとも考えられる。しかし、北陸地方から遠く、東京からも離れたベ類使用地域に断定ガが見られないことを考えると、1)の線で考えるべきと思われる。ただし、その場合でもナモシ類の状況を併せて考えると興味深い。なぜなら、ナモシもガ同様共通語ヨと似た伝達機能を持ち、かつナモシは丁寧さを含む終助詞だからである。ガは敬語とともに用いられることもあるが、ナモシのように終助詞自体に丁寧さは感じられないため、群馬・埼玉で丁寧なナモシとガが似た機能を持ちながら異なる待遇の表現として用いられていて、それらが見られない地域では別の終助詞がそれらにとってかわった可能性が考えられるからである。

#### 4.表現の固定化

前節では、推量形とガが共起する構文から断定形とガが共起する構文への変化があり、その過程で推量形のもつジャンナイカと類似の意味がガの意味という再分析が起こった(その結果推量形ではなく断定形が用いられるようになった)という仮説を提案した。同じように、もともと推量形がもっていた勧誘の意味がガの意味と再分析されている鹿児島方言の例を挙げた。

『資料』には、次のように意志を表すと考えられる形式にガと共起するものが見られた。岩手県宮古のデータで、意志の表現が4例見られたが、すべてにガが共起する(うち1例は逆接のガと解釈できるもの)。鹿児島県高山のデータでは意志の表現が4例見られ、そのうちの2例にガが共起する(1例にはガ由来かと思われるワが共起、後の1例は「～と思う」という構文の中にあつた)。これらの地点では表現の固定化が完全ではないにせよ起きていると言えよう。

- (40)a. ハヤク ハヤク ホーガ エーндаカラ ケーリアンスガ (岩手県宮古)  
早い方がいいんだから 帰りましょう。

b. ハイ ソゲン ユモスガ (鹿児島県高山)

はい そう言いましょう。

また、「～しなければいけない／ならない」という形式においてもガが共起する例が目立つ方言があった。愛媛県津島のデータにおいて、このような形式全6例のうち、5例にガが共起した(ただし、そのうちの2例は逆接のガとも解釈できる)。ほかに富山県入善、広島県水内、山口県秋芳、宮崎県南方でこのようなガが見られた。「～すればいい」という形式においてガが共起する方言もあった。山口県都濃では、このような形式全4例のうち3例にガが共起した。ほかに福岡県善導寺、鹿児島県高山でこのようなガが見られた。一例ずつあげる。このような義務的モダリティの表現にガが多用されるのは、聞き手に強く示す必要を感じるからであろう。

(41)a. モー ボツボツ カエラニヤイケンガ マー (愛媛県津島)

もうぼつぼつ帰らなければならぬよ<sup>17</sup>

b. モ ヒトバン トマッテ オカエリヤー エーガ (山口県都濃)

もう1晩泊まってお帰りになれば いいですよ<sup>18</sup>。

また、『鹿児島県のことば』には、推量表現ドは必ず「ガ」などの文末助詞を伴うとの記述があり、例文「サミカンド ガ」に「寒いだろう。ほら」の共通語訳が当てられているので、ドが推量表現、ガは終助詞と認識された上で共起が必須という形に表現が固定化した場合もあるようである。そして、奥村(1962)によると、京都府丹後地方では、推量にはダロ・ヤロ・ジャロを用いるが、ガと共起する場合に限って意志形と同じ形が用いられるとあるので、ガが現れる環境で推量形が固定化した場合もあるということになる。このような推量形の固定化は共通語での「泣こうがわめこうが」「何をしよう{と／が}」「行こうと思う」「食べようとする」「帰ろうか」といった表現と共通している。

## 5. 結び

本稿では、『資料』のデータを分析し、終助詞ガが推量形につくかあるいは断定形につくかを調査し、その地理的分布を検討した。用法の分析から推量形につくガから断定形につくガが派生したと主張し、地理的分布から、断定形につくガがかつてより広く分布していたが、優勢な地域からの他の形式により分布が狭まったと考えられることを述べた。

<sup>17</sup> 元の共通語訳は「もうぼつぼつ帰らなければならぬが まあ。」

<sup>18</sup> 元の共通語訳は「もう1晩泊まってお帰りになればいいのに。」

## 参考文献

- 榎垣実(1938)「和歌山県方言(五)」『国語研究』6巻2号 『日本列島方言叢書』14『近畿方言考②』(1996)pp.272-286 再録
- 榎垣実(1972)「三重県方言」 榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂 14『近畿方言考②』(1996)
- 大島一郎(1962)「伊豆利島方言の語法(II)」『国語学』49 p.256-264
- 奥村三雄(1962)「京都府方言」 榎垣実編『近畿方言の総合的研究』pp.三省堂
- 佐藤亮一編(2009)『都道府県別全国方言辞典』三省堂
- 白岩広行(2011)「方言の推量形式による意味変化：談話的機能へ」『阪大日本語研究』23 p.57-77 <http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/6730/1/23-03.pdf>
- 杉浦滋子(2006)「日本語諸方言に見る終助詞ガの形式上・機能上の差異」『言語と文明』4 pp.38-54 麗澤大学大学院言語教育研究科
- 鶴橋俊宏(2013)『近世語推量表現の研究』清文堂
- 日本放送協会編『CD-ROM版 全国方言資料』(1999) (NHK 出版)
- 平山輝男他編(1997-2013)『日本のことばシリーズ』明治書院
- 藤原与一(1962)『方言学』三省堂
- (1986)『昭和日本語方言の総合的研究 第3巻 方言文末詞〈文末助詞〉の研究(下)』春陽堂書店
- 北条忠雄(1971)「八丈島方言の国語学的研究(二)」『秋田大学学芸学部研究紀要』11 p.34-39
- 宮崎和人(1996)「確認要求表現と談話構造 —『～ダロウ』と『～ジャンイカ』の比較—」『岡山大学文学部紀要』25 pp.107-120